貧民の帝都

養育院の時代背景

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　64　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

人口百万人の大江戸八百八町。山手線の内側と隅田川の両岸を合せたぐらいの範囲が江戸でした。

現在の東京二十三区よりずっと小さい広さです。

江戸の土地の七割は武家屋敷で占められていました。全国諸藩の大名の妻子を住まわせ、大名が二年ごとに参勤交代でやってきて一年江戸で暮らす屋敷や家来たちの屋敷です。将軍家に直接仕える旗本や御家人の屋敷もありました。

図1　江戸の大きさ

図2　武家地と町人地

図3
江戸城と武家屋敷（オレンジ色）から、
人が消えた。

左の地図のオレンジ色の部分が武家屋敷のある武家地です。その隙間を埋めるように分散している緑色の部分が町人が住む地区と寺社です。

江戸百万人の人口の半分は、武家地に住む武士でした。残り半分が町人です。

◆

幕末、江戸城を官軍に明け渡すと、各藩の武士は一斉に自分の藩に帰りました。豊かな商人たちも戦乱を恐れ、江戸から出ていきます。

江戸の人口の半分が突然いなくなったのです。

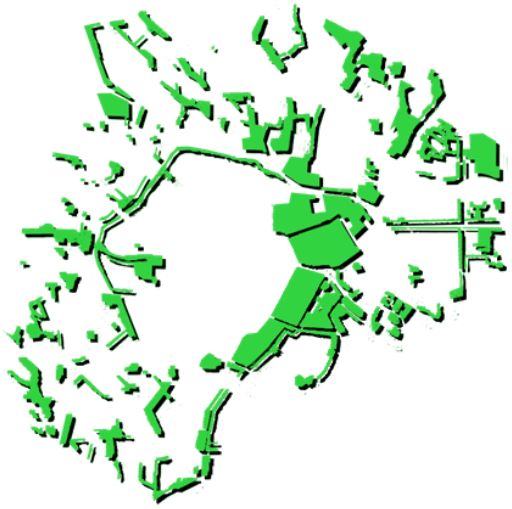


図2・3は、松山恵「都市空間の明治維新」（ちくま新書2019）p 17の図を宮本改変

江戸城も武家屋敷も人の姿が消えました。江戸は無人の土地だらけで、骸骨のような有様です。（図3）

江戸に取り残されたのは、町人と藩に連れて行ってもらえなかった下級武士でした。

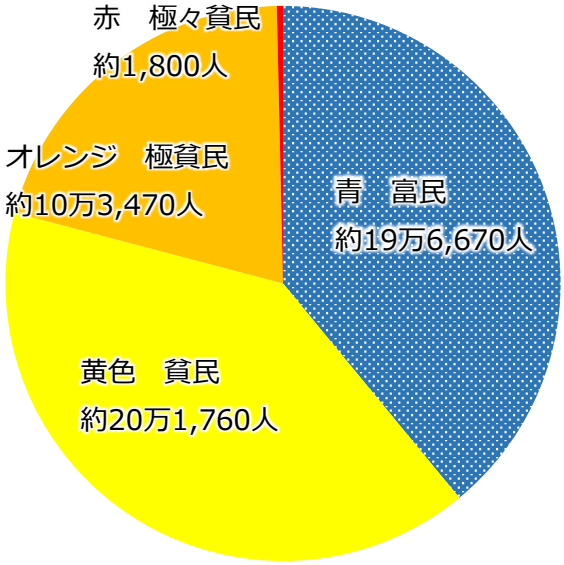
どんな仕事であれ給金を払う者もいなくなり、多くの町人や下級武士は失業しました。物資の流通も途絶え、貧しい人を助けるしくみもなく、多くの人が亡くなりました。

明治はじめの東京でも浮浪者があふれる状況は続き、明治五年に養育院が作られます。

明治元年に東京府は地域の有力者に命じて貧困者の数を調査しました。その結果が残っています。東京都編「東京市史稿　市街篇6」（一九六一）

東京の住民を、富民（家屋を所有）・貧民（借家住まい）・極貧民（七分積金でも救済を受けた者）・極々貧民（救済を希望している者）の四つに区分して調査したものです。

合計が約五十万人で、江戸の人口百万人が半減したことがこの調査でもわかります。



借家住まいの人をすべて貧民とみなすことはできませんが、極貧民・極々貧民という住む家がない困窮者が十万五千人もおり、東京の人口の二十％を占めていました。

東京に住む人のなんと五人に一人がホームレスだったことがわかります。そこには当然、大人だけでなく子どもも含まれます。

明治維新のころ、橋の下をねぐらにしていた孤児たち
「貧民の帝都」p23より

明治時代にはいると、全国で凶作が続き、農地を捨てた農民が東京に流入して貧困層は膨れ上がりました。

企業が増え工場の建設が進むと、貧困層の一部は工場労働者となりますが、日露戦争・第一次世界大戦後の不況、物価上昇、貧富の格差の拡大により、産業の発展の陰で生活困窮者は増えつづけました。東京の各地に貧民窟（スラム）が形成されます。

日本の近代化と並行して生じた貧困の状況と、養育院やほかの救貧施設の活動を詳しく説明した本に**塩見鮮一郎著「貧民の帝都」（文春新書　二〇〇八年）**があります。

「貧民の帝都」は養育院六十年史・百年史・百二十年史などの養育院刊行物とともに、養育院開設前史からその後の養育院の事業の歴史をたどることのできる書籍です。

養育院本院は移転を繰り返しましたが、その位置を現代の地図で示した図（本郷・上野・神田・本所・大塚・板橋）が本書に掲載されており、養育院があった場所を知る貴重な情報です。